東京大学哲学研究室『論集』39号（2020年度）
pp.32-45

ベルクソン『物質と記憶』における実在論と観念論への批判の検討

野瀬　彰子

序

ベルクソンは『物質と記憶』で実在論と観念論との対立について繰り返し論じている。実在論と観念論との対立の問題は、ベルクソンが『物質と記憶』において解決しようとする「二元論の問題」（MM 199-203）の一種である。二元論の問題とは、精神と物質という二項のあいだに本性の相違があるとすると、事実上成り立っている二項の「合一」（MM 200-1, 247, 248, 250）や「接触」（MM 246, 249）が説明困難なものになるという問題である。実在論と観念論とのあいだでは、一般的には、われわれの認識しているものがそれ自体で存在しているすなわち実在している物質なのか、それともわれわれの意識に現れているだけの観念にすぎないのかということが論じられている。この問題を、われわれの精神による認識と物質との「一致（coïncidence）」（MM 246, 250）がいかに成り立っているのかという形で捉え直すならば、実在論と観念論との対立に関する問題を二元論の問題の一種だと考えることができる。だが、それだけでなく、実在論と観念論との対立には、実在している物質などというものがあるのか否かという問題も含意されている。確かに、精神と物質との一致についての問題を二元論の問題の一種と捉えると、物質の実在が前提とされているようにも思われる。しかし、極端な観念論は、われわれの認識しているものを観念にすぎないと考えるだけでなく、実在している物質などなくわれわれの観念しかないと考える立場である。こうした観念論も考慮に入れるならば、実在論と観念論との対立には、精神と物質との一致についての問題だけでなく物質の実在についての問題が含意されていることになる。

ベルクソンは『物質と記憶』において、実在論と観念論との対立を乗り越え、精神と物質との一致についての問題と物質の実在についての問題を同時に解決する。とはいえ、ベルクソンが『物質と記憶』の各箇所で論じている実在論と観念論との対立は、精神と物質との一致についての問題と物質の実在についての問題に関わるという点では共通しているが、実のところ微妙に異なる意味を帯びたも

のである。とりわけ、『物質と記憶』第 1 章と第 4 章において論じられている実在論と観念論との対立の意味の違いは注目すべきものである。『物質と記憶』第 7 版の序でベルクソンは、第一性質を物質に割り当て第二性質を観念にすぎないとするデカルトを念頭においた実在論と、第一性質も第二性質と同様に観念にすぎないとするバークリを念頭においた観念論との対立に言及している。そして、「デカルトが物質を押しやった地点と、バークリが物質を引き寄せた地点の中間、要するに、常識がそれを見てとる地点に物質をおく」（MM 3）という「物質の見方」（MM 3）を『物質と記憶』第 1 章で規定し、「第 4 章はこのような物質の見方から諸々の帰結を引き出す」（MM 3）と述べる。しかし、実際には、『物質と記憶』第 1 章においては、実在論と観念論への批判はなされているが、第一性質と第二性質との区別すなわち量と質との区別については言及されていない。量と質との区別についてベルクソンが論じているのは、『物質と記憶』第 4 章においてである。それゆえ、いわばデカルト的実在論とバークリ的観念論との対立が乗り越えられるのも『物質と記憶』第 4 章においてである。それでは、『物質と記憶』第 1 章と第 4 章において、それぞれ、実在論と観念論との対立、精神と物質との一致についての問題および物質の実在についての問題はいかに論じられ、『物質と記憶』第 1 章と第 4 章の議論のあいだにはいかなる関係があるのか[1]。本稿は、『物質と記憶』第 1 章と第 4 章との違いと関係に注目しながら、ベルクソンが、いかにして、精神と物質との一致についての問題および物質の実在についての問題を解決し、実在論と観念論との対立を乗り越えるのかを明らかにする。

以上の問いに答えるために次のような順序で説明を進める。まず、本稿第 1 節では、『物質と記憶』第 1 章でベルクソンがいかにして実在論と観念論との対立を乗り越え、件の二つの問題に答えるのかを確認する。ベルクソンは、そこで、知覚と物質とのあいだに本性の相違を想定する従来の哲学者の観点から、知覚と物質との本性の相違を想定しない常識の観点へと立ち戻ることで、唯物論的実在論と主観的観念論との対立を乗り越えている。しかし、『物質と記憶』第 1 章ではあくまで従来の哲学者の観点への批判が行われているだけである。ベルクソンは常識の観点にとどまるわけではない。本稿第 2 節で示すように、ベルクソンは『物質と記憶』第 4 章において、直観に基づいた推論によって、われわれの精神の根底だけでなく物質的対象の根底にも持続しているものがあるという独自の理論を導き出している。このベルクソンの理論においてこそ、量と質との区別を考慮に入れた形で、精神と物質との一致についての問題および物質の実在についての問題、そして実在論と観念論との諸々の対立が解決される。

１.『物質と記憶』第１章における常識による実在論と観念論への批判

１．１　唯物論的実在論と主観的観念論との対立とイマージュ説

『物質と記憶』第1章では、実在論と観念論との対立といっても、とりわけ「唯物論的実在論（le réalisme matérialiste）」（MM 21）と「主観的観念論（l'idéalisme subjectif）」（MM 21）との対立が論じられている。簡単に述べるならば、唯物論的実在論とはわれわれの知覚しているものが実在している物質そのものだと考える立場であり、主観的観念論とはわれわれの知覚しているものがわれわれの意識に現れているだけの観念にすぎないと考える立場である。ただし、ベルクソンは唯物論的実在論と主観的観念論のいずれかに与するわけではない。唯物論的実在論でも主観的観念論でもない第三の立場を採る。それは、唯物論的実在論と主観的観念論とのあいだで実のところ共通している前提を見直すことで提示される。

ベルクソンが唯物論的実在論と主観的観念論に「共通の要請」（MM 24）として明示的に言及しているのは、われわれの知覚が実践的利害関係に左右されない「思弁的」（MM 24）な認識すなわち「純粋認識」（MM 24）であるという思い込みである。とはいえ、この思い込みが唯物論的実在論と主観的観念論との共通の要請であるということは必ずしも明白ではない。それは二つの学説がいかに発生したものなのかを明らかにすることで理解可能となる。唯物論的実在論が件の思い込みと関わっていることは比較的容易に確認できる。唯物論的実在論とはわれわれの知覚しているものが実在している物質そのものであると考える立場であった。われわれの知覚が実在している物質そのものを捉えているのだとしたら、われわれの知覚が利害関係に左右されることなく実在しているものを捉える純粋認識だということが含意されているのである。ところで、確かに、唯物論的実在論は、われわれの知覚しているものは実在している物質であるという「常識（sens commun）」（MM 41, 46）に従ったものである。われわれはこの常識をもつからこそ、目の前にあるものが実在しているか否かなどいちいち疑うことなく、それを利用したり避けたりしながら生きている。われわれの知覚が純粋認識であるという思い込みは、この常識に由来している。まず、われわれの知覚しているものが実在している物質であるという常識があり、そこからわれわれの知覚が純粋認識であるという思い込みを含意している唯物論的実在論が発生しているのである。しかし、もう一方で、われわれの知覚しているものはわれわれの身体の状態に応じて変化しているというのも事実である（cf. MM 21-4）。唯物論的実在論に対し

て、この事実を提示し、われわれの知覚しているものがわれわれの意識に現れているだけの観念にすぎないと主張するのが主観的観念論である。あくまで唯物論的実在論に対抗するために考え出された立場であるがゆえに、主観的観念論はわれわれの知覚が純粋認識であるということを前提としている。この思い込みを前提としたうえで、件の事実から知覚と物質とのあいだに「本性の相違」（MM 35）があると想定し、われわれの知覚しているものが実在している物質と一致しているか否かを論じているのが、唯物論的実在論と主観的観念論との対立なのである。かくして、われわれの知覚が純粋認識であるという思い込みが、唯物論的実在論と主観的観念論との共通の要請だということが理解できる。

だが、ベルクソンは以上のような常識と事実とを否定しているわけではない。むしろこれらの常識と事実との両方を説明しなければならないとしている。唯物論的実在論と主観的観念論は、それぞれ件の常識と事実の一方を無視している。唯物論的実在論は、われわれの知覚しているものは実在している物質であるという常識に基づいているが、その常識からわれわれの知覚を純粋認識だと思い込み、しかもわれわれの知覚しているものがわれわれの身体の状態に応じて変化するという事実を無視してしまう。主観的観念論のほうは、われわれの知覚しているものがわれわれの身体の状態に応じて変化するという事実に基づいているが、唯物論的実在論に対抗するものとして提示されるがゆえにわれわれの知覚が純粋認識であるという思い込みを保持しており、それにもかかわらずわれわれの知覚しているものが実在している物質であるという常識を捨て去ってしまう。それに対して、ベルクソンは、件の常識と事実の両方を説明できる理論を提示するのである。ベルクソンは自らの立場を、従来の哲学者あるいは「理論家」（MM 46）の観点ではなく、常識の観点に近いものだと述べている（cf. MM 46）。ベルクソンは、われわれの知覚しているものは実在している物質であるという常識の観点から考えるのである。それゆえ、主観的観念論のようにわれわれの知覚しているものが観念にすぎないとは考えないし、唯物論的実在論と主観的観念論とのいずれを採るべきかを論じる哲学者のように知覚と物質とのあいだに本性の相違があるとすら考えない。このように、知覚と物質とのあいだに想定されてきた本性の相違を解消しているのが、イマージュ説である。常識の観点から、知覚も物質も「イマージュ」（MM 32, 34, 35）という同じ類のものだと想定するのである。とはいえ、われわれの知覚しているものがわれわれの身体の状態に応じて変化するというのもまた事実である。知覚と物質とのあいだに本性の相違がないというイマージュ説を採用しながらこの事実を説明するために、ベルクソンは、われわれの知覚が

純粋認識ではなくわれわれの身体による行為のための実践的認識であり、われわれの知覚しているものは物質の総体すなわち「イマージュの総体」（MM 31）のうちわれわれの身体による行為に関わる部分が選抜されたものであると想定する。知覚と物質とのあいだにあるのが「程度の差違」（MM 35）あるいはむしろ「部分と全体との区別」（MM 35）だと考えるのである。そうすれば、常識に従って知覚と物質とのあいだに本性の相違を考えずに、かつわれわれの知覚しているものがわれわれの身体の状態に応じて変化しているという事実を説明できる。かくして、ベルクソンは、『物質と記憶』第1章において、われわれの知覚が純粋認識であるという思い込みを退け、件の常識と事実とを共に説明することのできる理論を提示して唯物論的実在論と主観的観念論とを乗り越えるのである。

１．２　常識の修正

『物質と記憶』第1章においてベルクソンは、唯物論的実在論と主観的観念論との対立について論じている従来の哲学者の観点をその前提から批判し、常識の観点に立ち戻ってそれらの対立を乗り越えている。その際、確かに、精神と物質との一致についての問題と物質の実在についての問題にも答が与えられている。すなわち、ベルクソンは、われわれの知覚しているものは実在している物質であるという常識を受け容れるのだから、物質が実在していることと、われわれの知覚が実在している物質と一致していることを同時に認めているのである。また、イマージュ説においては精神と物質とのあいだに本性の相違がないと想定されているのだから、精神と物質との一致を妨げるものはないということになる。そうして、唯物論的実在論と主観的観念論との対立を無効にしている。

しかし、常識の観点に立ち戻るだけでは説明できていないことがある。まず、物質の実在および精神と物質との一致は、常識において含意されているからという理由で無思慮に想定されているにすぎない。本当に物質が実在しており、精神と物質との一致が成り立つのかということが検討されていないし、それらの根拠も示されていない。さらに、常識が実在している物質と見做しているものをそのまま受け継ぐので、実在している物質とはいかなるものかも論じられていない。われわれの通常認識しているものにわれわれの主観的な見方が反映されているのは明らかである。それにもかかわらず、常識の観点にとどまるならば、われわれの認識しているもののうち、いかなる側面がわれわれの認識に由来し、いかなる側面が実在している物質に由来するのかを説明できないのである。それに加えて、実在している物質とはいかなるものかを考慮していないから、物質と観念につい

て量と質との区別から論じているデカルト的実在論とバークリ的観念論との対立に応答できない。だからこそ、ベルクソンは、常識の観点にとどまらず、「或る点では常識の態度を修正せねばならない」（MM 76）と述べる。そして、ベルクソンは、『物質と記憶』第 4 章において、常識の観点を越えて、独自の理論を提示する。

２．『物質と記憶』第 4 章における実在論と観念論への批判と持続理論

２．１　直観に基づく推論と物質的対象の根底にある持続しているもの

それでは、ベルクソンはいかにして常識の観点を越えて独自の理論を導き出すのか。それは、端的に述べるならば、「直観」（MM 203, 204, 205）に基づく推論という「方法」（MM 203, 205, 206, 208, 209）を用いることによってなされる。直観とは、持続しているものを認識するための認識機能として、ベルクソンによって『物質と記憶』で提示されているものである。持続しているものの存在は、『試論』で既に示されている。しかしながら、『試論』で示されたのは、われわれの自我の根底に持続しているものがあるということだけである。『物質と記憶』でベルクソンは、『試論』で示されたわれわれの自我の内にある持続しているものについての直観を参照しながら、われわれの通常認識している物質的対象の根底にも持続しているものがあるということを論じているのである。そして、このようにして示された物質的対象の根底にある持続しているものについての理論において、物質の実在についての問題と精神と物質との一致についての問題がいっそう積極的な仕方で解決され、さらには唯物論的実在論と主観的観念論との対立だけでなく、デカルト的実在論とバークリ的観念論との対立が乗り越えられるのである。

まずは、ベルクソンが『物質と記憶』第 4 章において、直観に基づく推論という独自の方法によって、物質的対象の根底に持続しているものがあるということを導き出しているのを確認していこう[2]。

『試論』で、ベルクソンは、われわれの自我の根底に持続しているものがあることを次のように説明する。外的事物のようなわれわれの通常認識しているものは、持続していないものである。すなわち、それ自体変化せず固定的で、互いに区別され相互外在的で、数えられるものなのだから程度の差はあれ等質的なものである。しかし、こうした持続していないものとは区別されるものがわれわれの自我の内にある。その例として挙げられているのは、例えばメロディーである。われわれは、いくつかの音が継起していくのを聴き、或る特定のメロディーを聴き取る。そのメロディーは、一見、諸々の音という要素を足し合わせることによ

って構成されているかのように思われる。しかし、当のメロディーは、諸々の音を同時に鳴らして奏でられる和音とも、同じ音を異なる順番で奏でる際のメロディーとも、また同じ音を同じ順番だが異なる速度で奏でる際のメロディーとも、異なる印象をもっている。仮にそのメロディーが持続していない要素から構成されているならば、以上の諸々の場合を区別できない。だが、実際、われわれはこれらの場合とは異なるものとして当のメロディーを聴き取っている。それは、諸々の音という持続していない要素が足し合わされることによってメロディーは構成されているのではなく、諸々の音だけでなくそれらの間隔および順番、そして音の奏でられる速度までもが一体となっているメロディー全体がそれ自体として何よりもまず先立ってあるものだからである。メロディーの内では諸々の音だけでなくそれらの間隔および順番、音の奏でられる速度といった要素が「相互浸透」（DI 75）して一つの持続しているものを成しているのである。こうして、ベルクソンは『試論』において、われわれの通常認識する持続していないものとは区別される持続しているものがあることを示している。

『物質と記憶』第4章においては、『試論』の持続しているものについての理論を用いて、物質的対象の根底にも持続しているものがあるということをベルクソンは示している。その際出発点となるのは、われわれが同じ物質的対象について、一方ではさまざまな質を感覚し、他方で量的なものを認識しているという事実である（cf. MM 203, 227）。『試論』でわれわれの自我の内にあることが示された持続しているものと同じ類のものが物質的対象の根底にもあると想定することで、こうした事実を説明できる。或るメロディーは他のメロディーとは異なる独特な質をもち、それは順番に継起する諸々の音が一つのメロディーへと凝縮されて成り立っている。だが、当のメロディーの内に含み込まれている音の一つ一つに注意を向けると、それらは互いに区別され数えられるもののように思われる。そのメロディー自身や他のメロディーの内に音階上同じ音を見出すこともできる。このように、メロディーは、一つに凝縮されているときには異質的なものだが、その凝縮が解かれると異質性が弱まるのである。物質的対象の質的な側面と量的な側面も同じように理解できる。われわれは物質的対象について「感覚的質」（MM 229, 230）を捉えるが、それは物質的対象の根底にある持続しているものをわれわれが凝縮して捉えているものである（cf. MM 230, 246）。われわれは程度の低い持続しているものを凝縮して感覚的質を得ているが、凝縮されるのに先立つ持続しているものは異質性の弱いものである。仮に感覚的質の凝縮が解かれるならば、「諸々の色が褪せていく」（MM 228）または「諸々の感覚的質が希釈されていく」

（MM 234）とベルクソンは述べている。これらの記述は、程度の低い持続しているものが以上のように異質性の弱いものであることを表している。かくして、物質的対象の根底にも持続しているものがあるということが推論によって導き出されるのである。

ただし、物質的対象の根底にある持続しているものは、われわれの精神の根底にある持続しているものすなわち「深層的自我」（DI 93）はもちろん、メロディーのような持続しているものよりもはるかに厚みの小さいものである。ベルクソンによれば、さまざまな持続しているものには「意識の緊張（tension）あるいは緩み（relâchement）の程度」（MM 232）の差違がある。われわれの意識に現れている感覚的質が凝縮されていっそう程度の高い持続しているものになっているのに対して、未だ凝縮されていないものとして想定される物質的対象の根底にある持続しているものはいっそう程度の低いものである。しかも、われわれの精神の根底にある程度の極めて高い持続しているものがわれわれの意識に現れるのは稀である（cf. DI 174）一方で、物質的対象の根底にある持続しているものは程度があまりに低いがゆえにわれわれの意識に現れ得ない（cf. MM 231）。われわれの意識に現れるのは、メロディーのような一定の厚みの持続しているもののみである。それでも、持続しているものは、以下に示すように、実在しているものである。それゆえ、ベルクソンの理論は、常識の観点とは異なって、持続しているものの直観という根拠をもっているのである。

２．２　物質の実在

以上で導き出された物質的対象の根底にある持続しているものの理論は、物質の実在についての問題と精神と物質との一致についての問題を、常識の観点よりも積極的に解決している。確かに、『物質と記憶』第 4 章は、第 1 章と同じように、物質が実在しているということ、および精神と物質との一致が成り立っているということを示している。物質的対象の根底に持続しているものがあるということは、物質的対象に関して認識される量と質とのあいだに本性の相違がないことを含意しており、精神と物質との一致を妨げるものはないということになる。しかし、『物質と記憶』第 4 章においては、それだけでなく、物質的対象の根底にある持続しているものの概念に、物質が実在しているということと、精神と物質とが一致しているということが、それ自体含意されているのである。

物質の実在についての問題に関しては、物質的対象の根底にある持続しているものの概念に実在性と客観性が含意されていることを確認できる。

まず、実在性のほうから確認していこう。ただし、ベルクソンは、物質的対象の根底にある程度の低い持続しているものに限らず、持続しているもの一般を「実在しているもの」（MM 203）だと述べている。ベルクソンが持続しているものを実在しているものと呼ぶのは、持続していないものがわれわれの思考により作り出されたものでわれわれの意識に現れているだけの観念だと考えられ得る一方で、持続しているものはわれわれの思考に先立ってあるものだからである。持続していないものが、われわれが思考において作り出したものであるということは、次のように説明される。ベルクソンによれば、持続していないものだけでなく、「等質的空間」（MM 236-7）もわれわれの思考によって作り出されたものである。空間は、持続しているものの程度の低さから作り出される。程度の低い持続しているものは異質性が弱く、等質的で空間的なものに置き換えられる余地をもつのであった。こうした持続しているものの程度の低さあるいは異質性の弱さ、それゆえ等質的で空間的なものへと置き換えられる余地を、ベルクソンは「拡がり（extension）」（cf. MM 247）と呼ぶ。この拡がりを抽象化することで空間は作り出される。そして、持続していないものは、この空間という「図式」（MM 235）によって持続しているものを分割することでわれわれの思考において作り出される（cf. MM 235-7）。それゆえ、われわれが思考を止めるならば持続していないものも空間も無くなることになり、それらはわれわれの意識に現れているものでしかない観念だと言えるのである。これに対して、持続しているものは、われわれが思考において空間や持続していないものを作り出すのに先立ってあり、しかもわれわれが持続していないものに注意を向けている際にも根底にある。持続しているものは、われわれの意識に現れているか否かに関係なくあり、観念ではなく実在しているものなのである。それゆえ、物質的対象の根底にある持続しているものは、持続しているものである以上、実在しているものなのである[3]。

それでは、物質的対象の根底にある持続しているものの客観性とはいかなるものか。客観性が物質の実在に含意されていなければならないのは、たとえわれわれの認識している物質的対象の根底に持続しているものがあるということが示されても、それがわれわれの精神の一側面でしかないとも考え得るように思われるからである。われわれが自らの精神の内に直観している程度の低い持続しているものを、われわれの精神とは区別され、われわれの主観に由来するのではない客観的なものすなわち物質だと言う理由を示さなければならない。ベルクソンは、それを、物質的対象についてわれわれが感覚的質という一つのものを捉えている時にも、実のところその内に無数の程度の低い持続しているものが凝縮されてい

ることから説明している（cf. MM 229）。感覚的質のほうは、われわれの精神が凝縮によって生じさせるものなのだから、主観的なものだと言える。これに対して、凝縮に先立ってある程度の極めて低い持続しているものは、未だわれわれの精神のはたらきを被っておらず、客観的なものだと考えられるのである。かくして、ベルクソンは、物質的対象の根底にある持続しているものが、実在しているだけでなく、われわれの精神とは区別される客観的なもの、すなわち物質であるということを示す[4]。

以上により、ベルクソンは、物質的対象の根底にある持続しているものが実在している物質であることを示し、物質の実在についての問題を解決している。

２．３　精神と物質の一致

さらに、『物質と記憶』第 4 章における物質的対象の根底にある持続しているものの理論において、精神と物質との一致についての問題も解決されている。物質的対象の根底に持続しているものがあるのならば、量と質のあいだの本性の相違が解消され、精神と物質との一致を妨げるものがないということは既に説明した。ところで、精神と物質とのあいだに本性の相違がなく、精神と物質との一致を妨げるものがないということは、『物質と記憶』第 1 章でも示されていた。しかし、『物質と記憶』第 4 章における物質的対象の根底にある持続しているものについての理論では、単に精神と物質との一致を妨げるものはないという消極的な形での解決だけでなく、物質的対象の根底にある持続しているものにおいて精神と物質との一致が成り立っているということが積極的な形で示されている。それは、物質的対象の根底にある持続しているものが、一方で他の持続しているものと同様にわれわれの精神の内に直観されているものであり、かつ他方でわれわれの精神とは区別される客観的なものだからである。『物質と記憶』第 1 章では、われわれの知覚しているものが実在している物質と同じものと考えられ、「権利上われわれは物質を物質自身において知覚している」（MM 76）ことを含意するイマージュ説が採用されている。これに対して、『物質と記憶』第 4 章では、「事実上、われわれは自らの内で物質を知覚している」（MM 76）ということをベルクソンは示しているのである[5]。

かくして、ベルクソンは、『物質と記憶』第 4 章において、物質の実在についての問題と精神と物質との一致についての問題を解決している。そこでは、実在している物質とはいかなるものかということや、精神と物質との一致が実際いかに成り立っているのかを積極的に示している。さらに、『物質と記憶』第 1 章におけ

るイマージュ説が常識において無思慮に前提とされていた物質の実在および精神と物質との一致をそのまま受容するものであったのに対して、『物質と記憶』第4章における物質的対象の根底にある持続しているものについての理論は、実在しているものたる持続しているものについての直観に基づいた推論によって導き出されており、根拠をもっているのである。

２．４　実在論と観念論との対立の乗り越え

それでは、『物質と記憶』第4章におけるベルクソンの理論は、実在論と観念論との対立をいかに乗り越えているのか。

まず、『物質と記憶』第4章における物質的対象の根底にある持続しているものについての理論は、『物質と記憶』第1章において常識の観点から批判された唯物論的実在論と主観的観念論との対立を乗り越えることができる。というのも、ベルクソンの理論は、われわれの知覚しているものは実在している物質であるという常識と、われわれの知覚はわれわれの身体の状態に応じて変化するという事実を両方とも説明できるからである。確かに、ベルクソンは、常識の観点を修正し、独自の理論を提示する。しかし、われわれの知覚しているものは実在している物質であるということを否定するわけではない。常識が無思慮に受け容れていることを独自の方法によって根拠づけ、さらに物質的対象の根底にある持続しているものというちょうど実在している物質に該当するものを積極的な形で示しているのである。一方で、『物質と記憶』第4章によれば、われわれの意識に現れている物質的対象の根底には持続しているものがあり、それは実在している物質である。それは、われわれの知覚しているものは実在している物質であると信じ込んでいる常識に、それが真である根拠を与えている。他方で、われわれが通常認識している物質的対象やその量および質は、表層的なものでしかなく、実在している物質である物質的対象の根底にある持続しているものとは別のものである。量的なものは、数えられ固定的なものなのだから、明らかに持続しているものではない。ところで、ベルクソンは『試論』で、持続しているものは等質的ではなく「異質的」（cf. DI 71, 72, 73, 77, 81, 82）なものだと述べている。それならば、実在している物質は量的なものではなくむしろ質的なものであるかのように思われる。しかし、物質的対象の根底にある持続しているものは、等質的でないといっても、われわれが通常思い浮かべる質とは別のものである[6]。われわれの通常思い浮かべる感覚的質は、「延長と純粋な質のあいだに共通のものがない」（MM 238）だけでなく、触覚と聴覚とのあいだのように「多様な種類の質のあいだに共通のものが

ない」（MM 238）ものである。しかも、持続しているものが絶えず変化しているものであるのに対して、われわれの通常思い浮かべる質は固定的なものである（cf. MM 228）。持続しているものをわれわれが通常思い浮かべる質と同一視することはできない。「これらの振動を表面上そう見えるほどには等質的でないものと考え、そしてこれらの質もまた表面上そう見えるほどには異質的でないものと考える」（MM 230）必要があるとベルクソンは述べている。ベルクソンは、われわれの意識に現れる量と質とが、「実践的な諸々の傾向」（cf. MM 221）に応じた形で分割され固定化されて作り出されたものだと説く（cf. MM 221-3）[7]。このことは、われわれの知覚しているものがわれわれの身体の状態に応じて変化するという事実を説明することを可能にする。かくして、『物質と記憶』第 4 章の物質的対象の根底にある持続しているものについての理論においても、唯物論的実在論と主観的観念論との対立が乗り越えられている。

さらに、『物質と記憶』第 4 章においては、第 1 章で論じられていない、デカルト的実在論とバークリ的観念論との対立も乗り越えられている。ベルクソンは、物質的対象の根底に持続しているものがあるということを示し、量と質との本性の相違を解消する。量と質とのあいだに本性の相違を想定し、量すなわち第一性質を物質に割り当て、質すなわち第二性質をわれわれの精神の内なる観念にすぎないと考えるデカルト的実在論を退けているのである。だが、もう一方で、ベルクソンの理論によれば、第一性質も第二性質もすなわち量も質も、実在している物質に由来している。それは、量と質の根底に持続しているものがあり、それが実在している物質だからである。それだけでなく、量も質も、実在している物質にその起源をもっている。一方で、実在している物質は、持続しているものである以上、われわれの通常思い浮かべる質とは別のものであるが、緊張をいくらか帯びている。緊張の程度が高くなり実在している物質が凝縮されることによって、いっそう異質性の高い感覚的質やわれわれの深層的自我が生み出される。物質的対象の根底にある持続しているものの帯びている緊張は、いわば質へと向かうはたらきである。他方で、実在している物質は、さほど凝縮されていないので異質性が弱く、等質的で空間的なものに置き換えられる余地をいっそうもつ。実在している物質は、緊張の緩みそして拡がりを帯びているのである。拡がりのほうは、それから空間と持続していないものが作り出されるのであって、量へと向かうはたらきと呼べる。実在している物質は、いくらか緊張し凝縮されており、かついくらか緊張が緩んでいて拡がりを帯びているのだから、量も質も実在している物質に起源をもち、全く人為的なものであるわけではない。この点は、第一性質も

第二性質も観念にすぎないと考えるバークリ的観念論に対する批判となる。かくして、ベルクソンは『物質と記憶』第4章においてデカルト的実在論とバークリ的観念論をも乗り越えているのである。

結論

本稿では、『物質と記憶』第1章と第4章との違いと関係に注目しながら、ベルクソンが、いかにして物質の実在についての問題と精神と物質との一致についての問題を解決し、実在論と観念論との対立を乗り越えるのかを明らかにしてきた。

『物質と記憶』第1章と第4章のいずれにおいても、ベルクソンは、物質が実在していること、および精神と物質との一致が確かに成り立っているということを示している。だが、『物質と記憶』第1章においては、常識の観点に立ち戻りながら、唯物論的実在論と主観的観念論を共通の前提において批判するのみである。これに対して、『物質と記憶』第4章においてベルクソンは、直観に基づく推論によって根拠づけながら、物質的対象の根底に持続しているものがあることを提示する。さらに、物質的対象の根底にある持続しているものについての理論は、物質の実在についての問題と精神と物質との一致についての問題をいっそう積極的な形で解決している。物質的対象の根底にある持続しているものの概念には実在性と客観性、そして精神と物質との一致が含意されているのである。これに加えて、唯物論的実在論と主観的観念論との対立およびデカルト的実在論とバークリ的観念論との対立を両方とも解決している。ベルクソンの理論は、唯物論的実在論と主観的観念論の起源である常識と事実を共に説明できる。さらに、ベルクソンは、物質的対象の根底に持続しているものがあるのだから量と質とのあいだに本性の相違がないことを示し、デカルト的実在論を退ける。もう一方で、量も質も実在している物質に由来していることを示し、バークリ的観念論とも異なる立場を採っているのである。

---

[1] 杉山は、訳書に対する解説という枠組みにおいてであるが、『物質と記憶』でベルクソンの論じる実在論と観念論が「主観＝自閉的カプセル」であるということを共通の前提としており、観念論はわれわれが認識するのを主観というカプセルの内にある観念だけであると考える立場であり、それに対して実在論とは主観の外部に客観的世界が実在していると考える立場であるとまとめている（cf. 杉山 2019, 365-7）。こうした実在論と観念論は、『物質と記憶』第1章において論じられる唯物論的実在論と主観的観念論しか表していない。『物質と記憶』第7版の序で言及されている第一性質と第二性質との区別に基づいた実在論と観念論を無視している。

[2] この点に関しては、拙論（野瀬 2019）において既に示した。

[3] 以上の点に関しては、拙論（野瀬 2020）において詳細に論じた。

[4] しかしながら、『創造的進化』と比べると、『物質と記憶』における物質的対象の根底にある持続しているものの客観性には疑問を投げかけることができる。物質的対象の根底にある持続しているものは、緊張を帯びているのだから、そこには何らかの記憶力がはたらいており、われわれの精神と本質的には区別されないと考えられるのである。われわれの精神と区別されないのならば、それを物質と呼ぶ理由はない。これに対して、『創造的進化』では、緊張のはたらきと対立する「弛緩（détente）」（EC 202, 203, 213, 239, 246）のはたらきが提示され、この弛緩においてこそわれわれの精神と区別される物質の存在が示されている。とはいえ、本稿ではさしあたり『物質と記憶』でベルクソンが示していることを明らかにするにとどめる。

[5] リキエは、われわれの知覚しているものを物質の中に位置づける『物質と記憶』第 1 章のイマージュ説が権利上のもので暫定的なものにすぎず、『物質と記憶』第 4 章において物質が事実上われわれの内で知覚されていることが示されているということに注目する（cf. Riquier 2009, 339）。だが、このことを実在論と観念論の議論に関係づけていない。『物質と記憶』第 4 章においては、物質的対象の根底にある持続しているものをわれわれが直観しており、この持続しているものによって、精神と物質とのあいだに本性の相違がないということだけでなく、精神と物質との一致がまさに成り立っているということが積極的に示されている。

[6] 平井は、ベルクソンの理論を汎質論に分類するが、経験されている質と「原現象性質」とを区別し、経験されている質のほうは偶有的だとする（cf. 平井 2017, 164）。それは、われわれが通常思い浮かべている質と根底にある持続しているものの異質性とを区別する本稿と共通している。しかし、ベルクソンの理論を汎質論と呼ぶと、物質的対象の根底にある持続しているものが、質に向かっていくはたらきだけでなく量に向かっていくはたらきをも帯びているということを見逃してしまう可能性がある。

[7] ウォルムスは、『物質と記憶』第 1 章においてベルクソンが身体による行為から出発することで「《イマージュ》と《実在しているもの》との隔たりと合致とを理解する」（Worms 2008 [1997], 282）ことを可能にさせ、デカルト的実在論とバークリ的観念論との対立を乗り越えていると解釈する（cf. Worms 2008 [1997], 37-8）。だが、『物質と記憶』第 4 章においてこそ、デカルト的実在論とバークリ的観念論との対立は乗り越えられる。しかも、そこでは実在論と観念論の対立と行為との関係も示されている。実在している持続しているものが実践的な諸傾向に対応する形で分割および固定されて量と質が作り出されるのである。量と質は実在している物質に由来しているが、われわれの身体による行為のために作り出されるものでもある。

［文献表］

１．一次文献

ベルクソンの著作に関しては以下の略号を用いて頁数を記した。

DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Puf, 2011 [1889].
MM: *Matière et mémoire*, Puf, 2008 [1896].
EC: *L'évolution créatrice*, Puf, 2009 [1907].

２．二次文献

Riquier, Camille. 2009. *Archéologie de Bergson. Temps et métaphysique*, Puf.
Worms, Frédéric. 2008 [1997]. *Introduction à* Matière et mémoire *de Bergson*, Puf.
杉山直樹. 2019. 「訳者解説」, 『物質と記憶』, 講談社学術文庫, 363-87.
野瀬彰子. 2019. 「ベルクソン『物質と記憶』における直観と方法」, 『論集』, 東京大学哲学研究室編, 第 37 号, 133-46.
———. 2020. 「ベルクソンにおける持続しているものの実在」, 『論集』, 東京大学哲学研究室編, 第 38 号, 41-54.
平井靖史. 2017. 「〈時間的に拡張された心〉における完了相の働き——ベルクソンの汎質論と現象的イメージ」,『ベルクソン『物質と記憶』を診断する』, 平井靖史・藤田尚志・安孫子信編, 書肆心水, 160-85.